

パネル1 報告 堀井恵子

パネル1「アジア諸国におけるビジネス日本語教育の現状と課題」では、予めパネリストに依頼しておいた2つの質問

A: パネリストの国の日本語教育にビジネス日本語教育は必要か？それはなぜか？

B: 必要である場合、ビジネス日本語教育実施にあたり課題は何か？その解決法は？
について、以下の発表があった。

- 1) アグス・スヘルマン・スルヤディムリア (インドネシア国立パジャジャラン大学)
 - ・日本の高齢化、日本企業の海外展開に伴い、インドネシア人が日本語を使って就労する機会が増加するため、ビジネス日本語教育は必要。課題は敬語、日本社会のルール、日本企業文化理解を含めたビジネス日本語教育の実施。
- 2) クマラグル・ラマヤ (マラヤ工科大学)
 - ・日本の高齢化、日本企業の海外展開に伴い、日本語を使って就労可能性の高まりに合わせてビジネス日本語教育は必要。企業のニーズ調査、教材作成、教員研修が課題。
- 3) ユップワン・ソーピットヴッティウオン (チュラーロンコーン大学)
 - ・日本語専攻の学生の就職先は大半が日系企業のためビジネス日本語教育は必要。課題は①必須科目ではないこと、②敬語の使い方やビジネスマナーなど言葉と知識が中心で実践がほとんどないこと、解決方法として、①「ビジネス日本語」の定義づけの上で敬語や日本人と付き合う上で知っておくべきマナーなど必要な要素を日本語の授業で教える、②日系企業との提携で研修機会を増やしたり、社員（日本人とは限らず、経験のあるタイ人でも可）を講師として迎えたりして、学生の実践の機会を増やし、また講師不足の解消につとめる。
- 4) チャン・ティー・トゥ・トゥーイ (ハノイ貿易大学)
 - ・日本語主専攻学生数(ビジネス日本語)は増加、教育方針は即戦力になる日本語人材を育成することで、日本語能力(N2以上、コミュニケーション)、専門能力(経済、経営、貿易実務、簿記など、実践的な知識がその内容。課題と対策は、①コミュニケーション能力不十分⇒発話中心のカリキュラムへの置き換え(会話、スピーチ、プレゼンテーション)、日本人学生との交流会、日本語クラブ活用、②キャリア志向が薄い⇒卒業生によるオリエンテーション、入学早期からのキャリア教育、③実践的知識が少ない⇒日本企業家による特別講座、日本人専門家によるビジネスマナー講座、日系企業現場見学、インターンシップの体系化、充実化
- 5) 永井 博子 (アテネオ・デ・マニラ大学)
 - ・フィリピンでは英語が普及しているため、日本語学習者の大多数が初級レベル。日本語力が必要とされる仕事現場は介護職・看護師(日比経済連携協定)、IT技術者、コールセンターなどで、学習者のモチベーションは文化に興味がある。課題は、中等教育への外国語教育導入、フィリピン人日本語教師養成と日本語能力向上(N2以上)、日本語能力上級者の養成機関の増設、また、職種別日本語教育機関の増設、日本社会を理解する専門能力を持つ人材の開発。
- 6) ウォーカー 泉 (シンガポール国立大学)
 - ・シンガポールではアセアン統括本部などの開設急増の中、外国人の労働ビザの制限のため日系企業での現地人雇用ニーズが高まるなど世界規模での人材獲得競争が激化。解決方法は①行政・企業と連携し日本語教育の重要性を教育機関に働きかける②日本の大学への長・短期留学プログラム③日本語教育者間の連携により、よりよい教授理論、教授法を構築④初級段階からグローバル人材育成を意識した教育を実践。

であった。その後、①ビジネスコミュニケーション教育と教室活動、②敬語教育の範囲、③ビジネスマナー教育の考え方、④初級からのビジネス日本語教育の可能性、⑤教材と教授法・教員養成、⑥企業との連携、⑦介護・看護の分野などの論点で議論をし、アセアンにおけるビジネス日本語研究と教育実践のネットワークを強化することを誓い、パネルは終了した。モデレーターは堀井恵子。